

# きらきらと敗れし如く櫓急ぐ

藤田湘子

櫓に乗ったことはないが、雪原に行く櫓は美しい景であろう。幌を被せた馬櫓だろうか。時折鞭が当てられ、シャンシャンとリズムのいい鈴の音も聞こえてきそう。

「敗れし如く」という措辞に面食らってしまった。しかも、「きらきらと敗れし如く」とは……。作者はこの時、敗北の中に美を見出していたというのか。きらきらと輝いて見えたのは、雪原の中を全力で走る櫓のエネルギーに、廃れ行くものの美を感じたからだろうか。

掲句は「新潟十日町六句」の前書の中の句。昭和四十二年は「鷹」三周年。湘子は「馬酔木」編集長を辞任し、翌年「鷹」は秋櫻子の忌諱に触れることとなる。湘子は「馬酔木」同人を辞退、「鷹俳句会」主宰となった。

1967年（s42作）第三句集『白面』 鑑賞・野本京